

大学体育における自己調整学習の機能：適応感に及ぼす影響

須崎, 康臣

<https://doi.org/10.15017/1789427>

出版情報：九州大学, 2016, 博士（教育学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏 名 : 須 崎 康 臣

論文題名 : 大学体育における自己調整学習の機能—適応感に及ぼす影響—

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

【研究の背景と目的】

自己調整とは「学習者が、メタ認知、動機づけ、行動において、自分自身の学習過程に能動的に関与している」(Zimmerman, 1986, 1989) ことであり、このような過程を通して行われる学習が自己調整学習である。自己調整学習は、特性的なものではなく文脈依存的なものであり (ジャンク, 2006), 習得可能なスキルである (ジーマン, 2007)。そのため、わが国においては、特定の教科 (犬塚, 2012; 岡田, 2012; 進藤, 2012; 植阪, 2012) における自己調整学習の効果が検討され、有益な知見が提供されている。そして、体育授業に焦点を当てた自己調整学習の研究も行われている。

しかしながら、体育授業、特に大学体育授業を対象とした自己調整学習研究において、自己調整学習の重要な規定要因とされている自己効力感 (Zimmerman, 1989) と自己調整学習との関連についての知見は少なく、また、体育授業における自己調整学習の心理社会的な機能についても、十分な検討がなされていないのが現状である。

ところで、大学生には、メンタルヘルスの悪化や、それに伴う休学、留年、退学といった学校生活への不適應問題を抱えている者が多い (内田ほか, 2013)。このような状況において、大学生が充実した学校生活を送るための支援が重要である。この支援となるものの1つとして、体育授業が考えられる。体育授業には、授業内での学習活動や教師との関わりだけではなく、仲間との様々な相互作用が含まれている (佐々木, 2003)。木内・橋本 (2012) は、「体育授業を通じた健康的なライフスタイルの構築は良好な修学状況の基盤として機能し (学問的適応)、体育授業でのスポーツ活動を介した他者との関わりは友人関係の開始や発展 (社会的適応) への貢献が期待される」とまとめている。つまり、体育授業は、対人関係を構築しながら、学習に取り組める場であることから、体育授業を通して学校適応を促すことができると考えられる。

以上のことから、本研究では、大学の体育授業における自己調整学習の機能を、体育自己効力感、自己調整学習方略、体育適応感の関係性の検証、および、自己調整学習方略が体育適応感を介して学校適応感に及ぼす影響過程の検証から明らかにすることを目的とした。

【結果の概要】

1) 体育自己効力感、体育授業における自己調整学習方略、体育適応感の関係を、共分散構造分析を用いて検討した。その結果、体育自己効力感は、直接的に、および、自己調整学習方略を介して間接的に、体育適応感を規定しており、その規定力は、間接効果の方が高いことが確かめられた。

(第1章研究1, 第1章研究2, 第1章研究3)

2) 体育授業における自己調整学習が学校適応感に及ぼす影響について検討するために、自己調整

学習方略が、体育適応感を介して学校適応感に影響を及ぼすという仮説モデルを設定し、共分散構造分析を用いて、このモデルの検証を行った。その結果、自己調整学習方略は、体育適応感の両下位因子である「体育適応」と「連帯志向」に正の影響を及ぼしており、そのうち、「体育適応」は、学校適応感のすべての下位因子（「居心地の良さの感覚」、「課題・目的的存在」、「被信頼・受容感」、「劣等感の無さ」）に正の影響を及ぼしていることが確かめられた。いっぽう、「連帯志向」は、「被信頼・受容感」以外の下位因子に対して、正の規定力を有していることが明らかにされた。（第2章研究4）

【まとめ】

本研究を通して、体育授業における自己調整学習の機能と、学校適応感の向上に寄与する体育授業の有効性について、一定の知見が得られた。

まず、体育自己効力感は、自己調整学習方略を介して、体育適応感に、直接効果よりも高い規定力で、影響を及ぼしていた。体育適応感の向上を促進するためには、体育授業に対する自信を高めることも必要ではあるが、それだけではなく、授業での行動である自己調整学習方略に関する知識を提供し、その使用を促すこともまた、有効である可能性が示唆された。

次に、自己調整学習方略、体育適応感、および、学校適応感との関連についての検討が行われた。その結果、自己調整学習方略が、体育適応感を介して、学校適応感に影響を及ぼしていることが明らかになった。このことは、大学生の学校適応感を高めるためには、体育授業での自己調整学習方略の使用を促し、体育適応感を高めることが重要であることを示唆している。このように、体育授業内での良好な対人関係の構築を目指すだけでなく、授業への積極的な取り組みを促す、すなわち、自己調整的な学習を促進させることが、学校適応感の向上をもたらす可能性が見出された。（第3章）

【今後の課題】

- 1) 本研究では、学校適応感に影響する要因として、体育授業における学習のあり方に焦点をあてた。しかし、学校への適応には、他の授業や課外活動、学外活動といった多くの要因が影響していると考えられる。今後は、これらも含めて包括的に、自己調整学習と学校適応感との関連を検討することが必要になる。
- 2) 本研究は、一時点のみの調査による横断的研究であるため、自己調整学習方略の使用が、体育適応感や学校適応感の変容にどのように寄与するかは検討されていない。今後は、縦断的研究を通して、適応感の変容過程について明らかにしていく必要がある。
- 3) 本研究では、仮説モデルの妥当性を検討するというアプローチで、自己調整学習の機能に関する知見を提示し、これらの活用可能性について言及することはできたが、実際の活用にまでは至らなかった。今後は、介入研究を通して、本研究の知見の実践的有用性を示していく必要がある。